



JWU 子育てサイエンス・ラボが発行するニュースレター「ゆりのき」は子育てにまつわる様々なトピックやお気軽に参加できる「子育てサイエンス・カフェ」のご案内を掲載しています。以前の「ゆりのき」も[公式HP](#)で閲覧できます

=====**第13回子育てサイエンス・カフェ報告（6月17日実施）**=====

「より良い子どもの遊び環境の実現に向けて

—震災後の福島の子どもの遊び環境回復を事例に考える—

今回の子育てサイエンス・カフェは、「より良い子どもの遊び環境の実現に向けて—震災後の福島の子どもの遊び環境回復を事例に考える—」をテーマに、震災後の福島での子どもの遊び環境の制限状況や回復に向けた取り組みを振り返りながら、いま私たちが直面しているポスト・コロナ期の遊び環境づくりに向けて、お話をさせていただきました。

①震災後の福島遊び環境の制限状況

2011年3月11日の東日本大震災による地震と津波の影響により、福島第一原子力発電所は、大量の放射性物質を放出する深刻な事故を引き起こしました。特に、放射線の影響を受けやすいと言われる子どもの遊び環境は大きな影響を受けました。

たとえば、震災後は、屋外遊び時間は約60分で震災前の半分に短縮され、「海」「川」「森」「山」など自然とふれあう場での遊びが、震災前よりも大きく減少しました。放射線を避けたうえで、もともと子どもが遊んでいた自然とのふれあいを実現することが求められていました。



②震災後の遊び環境回復に向けた取り組み

これまでに震災後の福島の子どもの遊び環境づくりに向けた取り組みは、①除染などの屋外遊び環境の保障にかかわる事業、②放射線を避けて、ストレス解消と子どもの体力向上を図る屋内遊び場の整備、③放射線による影響を低減し、自然とのふれあいを実現する保養や自然体験活動の機会の提供の三本柱により実施されてきています。しかしながら、子育て

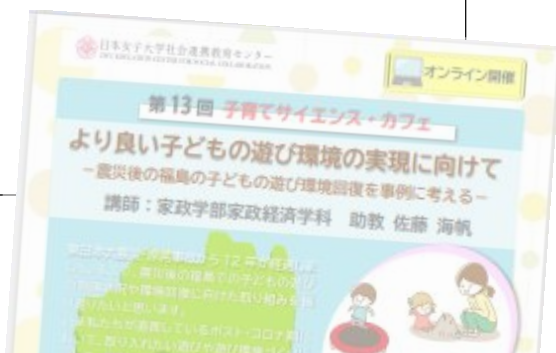
家庭の遊び環境へのニーズの全てを満たすことは難しい状況です。

③これからの遊び環境づくりに向けて

そこで、より良い子どもの遊び環境の実現に向けて、子育て家庭と社会的環境の関わりをみていきます。子育て家庭は、遊び環境の利用により、「子育ての心理的負担が減り、安心感を感じることが多くなった」、「子育てに関する知識や情報を得ることができた」、「自分たちが利用する遊び場は、自分たちも一緒に良くて行こうと思った」などの生活の変化がみられることが明らかになりました。さらに、「日常生活で、自分の能力を発揮している」、「自分の生活に満足感を感じている」保護者は、理想に近い環境での遊びが実現できていることも分かりました。

以上のことから、これからの遊び環境づくりについて、エンパワメントにより積極的に生活意識を高めることが、より良い遊び環境の入手・遊び環境づくりへの参画につながっていくと考えられます。また、それが可能となることで、情報・知識を得る、自分がコントロールできる時間を確保する、心身の調子を良い状態に保つ、自分が大事にするライフスタイルを実現することなど、生活資源を活用していく可能性が高まると考えられます。

これらは、いま私たちが直面しているポスト・コロナ期においても共通の課題と考えられます。東日本大震災・原発事故から12年が経過し、震災の記憶が風化してきている今こそ福島の経験を忘れずに、心を寄せていただくと幸いです。（家政学部家政経済学科 助教 佐藤海帆）



～子どもの「嫌い」や「不気味」を科学する～

(人間社会学部心理学科 教授 伊村 知子)

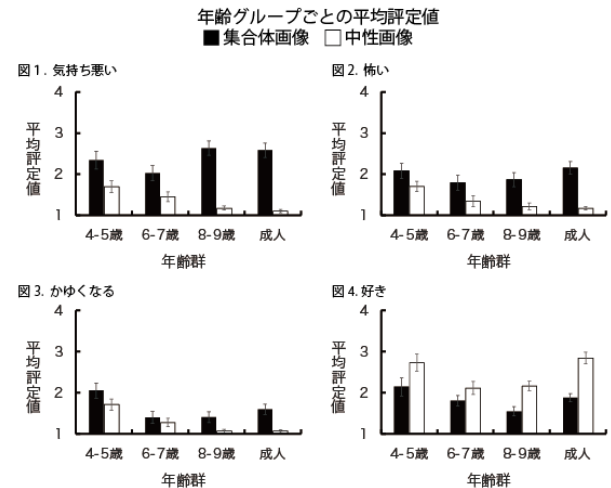
伊村研究室では、子どもたちの見る力や感情の発達について調べています。今回は、さまざまな感情の中でも、何かを怖がったり、嫌がったりする感情の発達についての卒業研究をご紹介します。恐怖や嫌悪などの不快感にまつわる感情は、危険から身を守るために大切な役割を果たしています。たとえば、ヘビやクモのような有毒生物を怖がったり嫌がったりする反応は、赤ちゃんや人間以外の霊長類にも見られます。一方で、このような反応が、多くの爬虫類や虫、そのほかのものに対する否定的な態度につながることもあります。

最近、インターネットや SNS などを通じて、ハスの花托やハチの巣に代表されるような、円や穴の集合パターンに対して不快感を感じるという現象が知られるようになりました。学術的には、「集合体恐怖」(トライポフォビア)と呼ばれており、15%くらいの人ที่ไม่快感を持つとのデータもあります。その原因はまだ明らかになっていませんが、有毒生物の中にも豹紋柄を持つものや、斑点などは皮膚病などの感染症を連想させたりすることから、本来、有毒生物や感染症などを避けるための適応的反応が、円や穴の集合パターンにも生じるようになったのではないかと仮説などがあります。これまでのところ、「集合体恐怖」はヘビやクモのように恐怖症に分類されるには至っていませんが、どのような人が不快感を感じやすいのかについて、年齢や性別による違いや個人差に関する調査が進んでいます。しかし、幼い子どもたちにも、集合体への不快感を持つことがあるのか、それがいつ頃生じるのかは、これまで明らかになっていませんでした。

そこで、4歳から9歳の子どもたち(4,5歳児、6,7歳児、8,9歳児)の3つのグループに分けて、それぞれ20名ずつ合計60名と大人20名を対象に、「集合体画像」(ハスの花托やハチの巣など)と「中性画像」(マンホールの穴や丸窓など)を見た時に、どの程度「気持ち悪い」、「怖い」、「かゆくなる」、「好き」と感じるかについて、4段階で答えていただきました。回答を1から4に得点化して、それぞれの質問について年齢グループごとに平均評定値をもとめました。

その結果、図1から図4に示したように、「気持ち悪い」、「怖い」、「かゆくなる」については、すべての年齢グループで、中性画像の評定値よりも集合体画像の評定値の方が高く

なりました。逆に、「好き」については、すべての年齢グループで、中性画像の評定値よりも集合体画像の評定値の方が低くなりました。このことから、少なくとも4,5歳頃から、大人と同じように、集合体への不快感を感じていることがわかりました。



今回の研究では、遅くとも幼児期には集合体恐怖が生じる場合があることが示されました。次の研究では、集合体への不快感を感じる原因やプロセスを明らかにすることにより、不快感の緩和に向けたアイデアを提案することを目指しています。

● 本研究は、鈴木千春さんの2020年度卒業研究としておこなわれました。

● 卒業研究の一部は、2023年2月に雑誌「Scientific Reports」に掲載されました。

Suzuki, C., Shirai, N., Sasaki, K., Yamada, Y., & Imura, T. (2023). Preschool children aged 4 to 5 years show discomfort with tryphobic images. *Scientific reports*, 13(1), 2768.

論文 URL:

<https://www.nature.com/articles/s41598-023-29808-1>



=====**適度な汗かき体験を**=====

人の汗腺数は幼児期までの暴露環境に依存し、大人になってから増えることはありません。エアコンは確かに快適ですが、全く汗をかかない部屋ばかりに居ると、大人になってから暑さに弱い体になってしまう懸念があります。幼児期は汗疹が悪化しない程度に適度に汗をかき体験が必要です。また、人には暑熱順応の能力があります。これから夏に向かうシーズン、暑熱環境に暴露されると、徐々に汗腺機能が強化され、汗の量が増えます。その後さらに暑熱環境を経験すると、今度は重要な水分を失わないように汗の量を減らし、末

端血流を増やして皮膚温度を上昇させることで人体から放熱できるようになります。このような過程を経ることで、暑さに強い体になります。エアコンは便利で快適ですが、人の本来の調節機能を阻害しないよう、使い過ぎには注意しましょう。

(家政学部住居学科 教授 細井 昭憲)



エアコンの賢い選び方・使い方、解説します！

ポイント! 1

エアコンの能力クラス・ポイント

まず設置する部屋の大きさに合わせた機器選択が必要です。カタログに記載される「畳数の目安」の基準は 1960 年代の古い無断熱住宅を想定しており、現代の断熱気密性能が向上した住宅に対しては過大な機器選択となる傾向があります。巨大な窓ガラスや吹き抜けの無い部屋であれば、「畳数の目安」から一ランク下げた機器を選択すると良いでしょう。また、20 畳を超えるような部屋の場合、20 畳用のエアコン 1 台ではなく 8 畳用を 2 台分割設置した方が、価格、運転効率、気流分布の観点からメリットがあります。

ポイント! 2

カタログの読み方

カタログには様々な情報が記載されていますが、特に着目して欲しいのは「通年エネルギー消費効率：APF」もしくは「COP」そして「冷房/暖房能力の範囲」です。APF と COP は決まった運転条件における運転効率で、この数値が高いほど省エネです。能力の範囲は特に最小値に注目してください。エアコンは断続運転で効率が悪化するため、最小値が小さいほど実使用時の効率が良くなります。

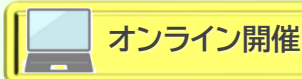
ポイント! 3

設置方法と運転方法

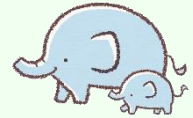
室外機の周りに気流を妨げる物や壁があると運転効率が低下します。幅が狭く、壁で囲われたバルコニーや、隣地との境界に設置することは、望ましくありません。またリモコンの運転モードは「自動」に設定すれば多くの場合適切ですが、風量が多いほど運転効率が向上します。風切り音や風が気になる範囲でなるべく風量を多く設定すると良いでしょう。風が気になる時は、リモコンで送風方向を上向き（水平）に設定すると、不快な気流を防ぎつつ、吹き出した気流が部屋を大きく循環するので、上下温度分布差も小さくなる可能性があります。能力が小さくなった時に自動的にこのような循環モードになる機種もあります。



=====**次回の子育てサイエンス・カフェは!**=====



＼ご自宅からお気軽にご参加ください！／



講師： 家政学部児童学科 教授 岡本 吉生

概要：「子どもの生きる力」が最近の教育目標となる背景に、子どものひ弱さ（脆弱性）の問題があるように思います。「わんぱくでもいい たくましく育てほしい」というキャッチコピーが流行ったのが1979年ですから、四半世紀ほど子どもはひ弱いままだったかもしれません。今回は、ひ弱い子どもなりの生きるための戦略をアタッチメントの理論から考えてみたいと思います。

▼申込み

日時： 2023年7月29日(土) 10:30~12:00

申込： お申込受付後、返信メールにて Zoom 詳細をお送りします。

<https://forms.office.com/r/ttbYUqMuj8> または QR コードからお申込みください。

- 参加費：無料
- 主催：日本女子大学社会連携教育センター



第15回子育てサイエンス・カフェは9月30日(土)を予定しています！(オンライン開催)
テーマは“保育室の換気”について。詳しくは次回メールマガジン、公式HPでご案内いたします。
どうぞお楽しみに！！メールマガジンご登録はこちら▶ <https://forms.office.com/r/1bBeuyreWG>

日本女子大学人間社会学部心理学科・日本女子大学社会連携教育センター心理相談室 共催

子育て支援者を中心とした多職種協働のダイナミズム —「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」の経験から—

日時：2023年10月29日(日) 13:30~15:30

講師：日本女子大学名誉教授 吉澤 一弥

概要：このプロジェクトのデザインは、立ち上げ時に筆者がたまたま出会った活動理論学のフレームワークを参考にしました。ボトムアップ的な集合知から生まれた「親を加害者にしない支援のヒント集」、「現代的な共同養育モデル」、「子どもの成長の喜びを支援者が親に伝達する意義」などの概念形成のプロセスを振り返り、今後の課題につなげたいと考えます。

申込：後日、心理相談室ホームページにてお知らせ予定です。

【心理相談室ホームページ】

https://llc.jwu.ac.jp/exl/psyc/nlc_psyc.htm



「JWU 子育てサイエンス・ラボ」を運営する社会連携教育センターの公式 SNS アカウントです。

